

「絵本制作から学ぶコミュニケーション力」

— 中央線201系絵本の制作を通して —

共立女子中学高等学校

池末和幸

1 はじめに

ある学校の公開授業での様子です。それは、保護者の一般参観日と兼ねられていましたが、私には驚きの連続でした。

公開中の授業見学では、教師が一斉授業しているにも関わらず、教室内の子どもたちが、勝手ばらばらに話をしているのです。なぜ、教師はここで全員を静かにさせて沈黙を作らないのだろうか、疑問に思ったのもつかの間、授業はあれよあれよと進んでいくのです。けれども、私の耳には、その授業の声がよく聞こえません。それは、教室内の子どもが静かにしていないこともありますが、それ以上に教師自身の話し方に問題があるように思われました。まず、声そのものが出ていないし、同じ音程で、間を置かずに、ただしゃべるだけなのです。これには、正直閉口しました。明らかに、「相手に伝わる話し方」ではないのです。ここで注意しておきたいのは、この学校は、いわゆる指導困難校などではない、普通の学校であるということです。

私は残念な気持ちであると同時に、果たして自分の授業はどうなのであろうかと、急に心配になり、自分の授業を見つめなおすきっかけとなりました。

最近の生徒たちは、「思っていることをうまく相手に伝えられない」とか、「きちんと人の話を聞いて理解できない」などといわれることがあります。いわゆるコミュニケーション力の低下です。しかし、果たしてその通りなのでしょう。その一端を、この公開授業の中に垣間見た気がしました。

教科書の内容を教えるマニュアルはありますが、生徒教師が、その日にどのようにしてコミュニケーションして、1時間の授業を組み立てるかのマニュアルは存在しないのです。

教師と生徒が一つの教室で、共にコミュニケーションを取り合う効果的なコミュニケーション力養成法を考え、授業の中でいろいろな工夫を加えてみました。しかし、教室での一斉授業では、どうしてもできないこともありました。何かよい教育手法はないかと考えた末に、ケーススタディとして取り組んだのが、ここで紹介する「絵本制作」です。有志の生徒6人とともに、手探りの絵本制作が始まったのです。

2 なぜ絵本なのか？

これまで高校の「地理」の授業の中で絵本を用いたことが何度かありました。なぜ高校生の授業に絵本なのかと疑問を持たれるでしょう。私の地理の授業では、度々授業で世界各地の民話を紹介しています。ここで、私は積極的に「絵本」を用いています。

絵本とは基本的に子供向けの本です。そして絵本は幼児が自分で読む、というよりは、読み聞

かせによって眺めて、そして耳で聴いて楽しめるように作られている、ということです。つまり、耳で聴いて理解できる程度に言葉はやさしくし、さらに字数そのものにも制限がかかっているのです。これは作者からすれば、言いたいことを簡潔に表現せねばならず、技術的にはかなり高度です。本屋さんではたくさんの絵本が棚に並んでいます、本当にすばらしい絵本というは、含蓄のある言葉が「音」という糸によって紡いであるかのようにつながっているものです。過去の名作と言われる文学作品を、自分で音読してみるとよくわかります。言葉が音の響きとともに、まるで音楽のようにつながっていることに気づくはずです。五音、七音などの音の切れ目で意味切れがあり、さらに息継ぎをしても不自然ではないように、文章自体がメロディーを持っているのです。夏目漱石の「我輩は猫である」や清少納言の「枕草子・春はあけぼの」など、声に出して読むのと、黙読するのでは全く違う作品を読んでいるほどの違いです。子どもが何度も読んでほしいとねだる絵本は、決まって音の響きが心地良いものです。

また、絵本というものは、分析することができます。あたりまえの話ですが、絵本には絵があります。これは「絵」と「文」がお互い補完関係になっていて、言葉で表現できないものは絵で、絵で表現し切れないものを言葉で表現し、お互いに重複しないように構成されています。子供たちは目と耳からの情報を頭の中で合成して心で感じているのです。これは、とかく板書と教科書の文字情報に偏りがちの高校の授業では、生徒たちに良い刺激となります。

コミュニケーションの基本が「声に出して人と人とが直接やり取りすること」だとするならば、絵本はコミュニケーション力を身につける最高の教材である、ということができると思います。さらに一歩進んで、高校生が絵本制作をするということになれば、これは技術的に、かなり高度なものを作っている、ということになるでしょう。

3 201系電車のわけ

制作した絵本のテーマは次のようなものです。東京のJR中央線で引退間近な201系電車に関わった人たちの思いを、取材によって綴るものです。東京駅から高尾駅に向かう電車1両1両に、それぞれ201系に思い入れのある人が乗ってきます。見開き1ページに一人の構成で計10両分の紹介をしていきます。

なぜ電車なのか？という疑問があるでしょう。しかも201系にこだわるとはどういうことか。一般に男の子は電車が大好きで、電車を題材にした絵本も数多く売られています。しかし、今回の絵本制作では、電車好きの子ども向けのもの、ではないのです。もっと教育の根底にある論理による選定なのです。その理論を201系電車の技術面から考察します。

この電車は昭和56年から中央線を中心に使われてきました。その当時はオイルショック後で、世界は省エネルギーを目指していた時代ですから、この電車も省エネの最新技術をもって製作されました。しかし、すでに30年を経過しており、老朽化したものから順次、新型電車への取替えが始まったのが一昨年のことです。この201系電車引退が時々ニュースになります。しかし、残念なことに、この電車の特徴である「省エネの技術」がニュースで扱われることはほとんどありません。

そんな折、2008年4月のある新聞記事に目がとまりました。それによると、中央線の豊田にある車庫の元技術員が、当時としてはハイテクのかたまりだった新型201系が入ってきたことで、電気

の勉強を一からやり直し、大変な苦勞をした、というものでした。さらに、当時としては最新の省エネ技術だった201系も、今では、もっと省エネの電車ばかりになって、引退もやむなしかな、という技術員の思いがありました。

私は、この当時の最新技術に注目し、201系電車を絵本のテーマとして取り上げ、ドキュメンタリーとして制作することとしました。ですから、生徒たちには、毎日、電車を利用している視点で、201系の技術を取材してほしかったのです。生徒たちは、やがて母となり子どもの手を引いて電車に乗る時がくることでしょう。そのときに、技術の集大成としての電車のすばらしい世界を、子どもに目を輝かせて語ってほしかったのです。それは、日本の技術力を伝えることであり、社会のマナーや安全教育にもつながります。いつか将来、子どもに電車のしくみの難しいことをきかれた時、「お父さんに聞いてごらん、お母さんは難しいことはわからないから。」や「そうねえ、なんででしょうねえ、すごいねえ」という生半可な受け答えで、あるいは「お母さん文系だし」などと、子どもには意味不明のことを言ったりして、その場をうまく濁してほしくないのです。なぜなら、子供たちの技術に対する好奇心が、その瞬間に絶たれてしまうことが、日本の教育と、将来の社会に対して、最も憂慮されることなのです。国際的に懸念される理数系の力の低下は、難しい数学の問題が解けるか否かという以前に、技術に対する好奇心を、幼児期に育てられるかどうかポイントであると考えられるのです。

教師は次の世代の子供たちを育てるだけでなく、その子供たちが親になったときに、さらに次の世代を育てることまで考えて教育をする。人が人を育てるといふは、最も尊い仕事であり、教師の仕事は3世代後まで考えて教育をするべきであると、考えています。

4 準備は教師の仕事

絵本の制作は大きく次のような流れで進めました。

「取材」→「編集」→「描画」

まず「取材」を行い、生徒たちはそれをレポートにまとめます。レポートとは要するに取材で聞いたことや、当日の状況、こぼれ話などをまとめたものです。そのレポートを元に、自分が担当するページの下絵と文を作ります。もちろん下絵は下手でかまいません。そして、全員で文と下絵を検討し、修正を加えていきます。最終的にページ順に並べて、一冊の本となったときに、絵のつながりに無理がないか、文を読んでみて不自然な発音は続かないか、などをチェックします。それから後、絵を描く担当の生徒と打合せをしながら具体的な描画作業を詰めていきます。

ここで注意したいのは、この「絵本制作」は、コミュニケーション力を養うための学習活動の一環であるということです。ですから、取材のアポイントメントや、取材場所の確保は教員が担当しましたが、しかし、これが苦勞の連続でした。

この企画を私なりに考えたときに、有志の生徒を募集したのです。名乗りを挙げた生徒が仲間を引き連れてきて、最終的に6人集まりました。(後に絵を描くのを専門とする生徒が一人加わり、7人になりました。)この生徒たちは、本校で実施している校外学習特別講座に何度も参加してくるような生徒たちばかりでした。私も、この校外学習特別講座の企画を担当しているので、この6人のことはよく知っていました。ですから、この生徒たちであれば絵本制作を、かなりまじめに取り組ん

でくれるだろうと大いに期待できました。そこで、201系の電車を取り上げてみたいがどうだろう、と生徒たちに投げかけました。さらに、「この世に1冊しかない絵本を作り上げることは、みんなの将来にきっと大きな影響を与えるはずだから」、と熱く語りました。生徒たちもすっかりそれに巻き込まれて、「やってみよう」、とすぐに決まりました。ところが、その後の企画会議で、生徒たちが挙げてきた「取材したい人」は、とにかく難しい人たちばかりだったのです。201系電車の開発者その本人や、201系の登場する前の古いタイプの電車と、201系の後の最新型のステンレス電車の、合わせて3つの乗務を経験したことのある運転手さんや車掌さんなど、はっきり言って何のツテもない私には、どうやってこうした人々を探し当てたらよいか、完全に白紙からの出発でした。とは言っても、生徒たちがあれこれ考えて絵本の登場人物を考えたのですから、何とか実現してやりたいという気持ちもありました。それに、201系電車のことや、当時の時代背景などを調べているうちに、私の方も本気になってきていました。開発者自身に会ってみたい、会って開発当時の思いを、ぜひ聞いてみたい、とも思うようになりました。

そこで、まず教師側の陣営も強化しておく必要があると考えて、智慧の実プロジェクトとして、普段から教科・科目を超えた取り組みをしている、国語の先生と物理の先生に協力を願いました。幸い2人の先生とも、この絵本プロジェクトの主旨を理解し、協力を快諾してくれましたし、何よりも、この企画そのものに理解を示してくれたことが、私自身の心の支えともなりました。こうして生徒6人に教員3人の企画会議は何度も開かれました。まだ、誰も取材OKをもらっていないのに、夢だけは広がっていきます。

そうして企画会議から2ヶ月経った6月に、大宮の鉄道博物館で「中央線と201系の企画展」があることを知り、みんなで出かけました。生徒たちは遠足気分で作る気満々ですが、一人気分が晴れないで、もやもやしていたのは私でした。誰にも取材することができずに企画倒れになるかもしれない、そうしたら、今日の鉄道博物館見学は、いったい何だったんだ、ということになってしまう。まずいなあ、と内心かなり焦っていました。にもかかわらず、見学が終わって出てきた生徒たちは、「先生！アイスクリームごちそうしてくださいよ！」などと言ってくるのです。「そんな余裕あるわけないだろう、このまま誰にも取材できなかつたら、いったいどうするんだい！」と返したら、「まあ、それはそれでいいじゃないですか、ははは。」と、私と生徒の間のテンションはますます開いていくばかりだったのです。

さて、次の週が明けた月曜日、連絡を取っていた方から「201系開発の主任責任者と連絡が取れて、取材に応じてくれることになりました。」と連絡が入りました。「やったあ！」私は思わず叫んでしまいました。そして、ここから話はとんとん拍子に進み、あっという間に生徒たちの出してきた「取材したい人たち」への取材が、概ね可能になっていったのです。

5 取材から編集で学ぶコミュニケーション

これは、人と人が直接会って話を聞くわけですから、こちらが用意しておいた質問をたて続けにしたところで、よい取材とは言えません。取材相手と会話のキャッチボールをしながら、相手の表情の変化を見極めて、次の質問につなげるわけです。また、相手が一番言いたいことを探り出すことも大切です。正直なところ、これにはかなりの経験値が求められるため、大人でも簡単にはいかな

い技術だと思っています。ですから、最初は下手であっても、生徒たち自らが経験することが何よりも大切だと考えて、多数の取材をこなしました。

取材はできるだけ相手の本音を聴きたいものです。それは一般的に、相手と会話のキャッチボールがうまくできたときに、人は本音を漏らすものです。生徒たちは、どのような質問の後に、相手が本音を漏らしたか、どのような相槌で表情をやわらかくしたのか、という点に注意します。なぜなら、絵本は短い文と絵というシンプルな構造なので、本音をつかまないと絵の描きようがないからです。

そして編集は、取材で得た情報をどこまで短くできるか、ということに尽きます。取材は概ね1時間以上になりました。それらを相手に許可を取った上で録音し、一字一句文字起こしすると、A4レポートで6枚以上にもなります。これを取材当日の相手の表情などから分析し、最も伝えたい気持ちがあるものを抽出するのが編集作業ということになります。

どの言葉を残して、どの言葉を切るか、短くまとめることがどれほど難しいことかが、生徒たちにもよくわかったと思います。大学入試でも、文を要約させるタイプの問題がありますが、その字数制限が短いほど高度なテクニックが要求されることを、生徒たちは日ごろの国語指導の中で知っています。ですから、取材後に生徒たちには、次のように課題を出しました。

「150字以内で、しかも子どもがわかる言葉を使うこと。」

これには生徒たちも悲鳴をあげていました。

「そんなに短くできません！」

中でも編集するのが難しかったのが、絵本の中では新宿駅で出てくる向谷実さんです。向谷さんは、音楽グループ「カシオペア」のキーボーディストであり、また、トレインシミュレーターをプロデュースした方です。トレインシミュレーターとは、運転士になったように電車の運転ゲームができるものです。向谷さんは、すでにこのシミュレーターで中央線のシリーズを3作もリリースしているので、中央線に対する思い入れも強いのであろう、という分析をし、こちら辺りを取材で突っ込んでみよう、乗り込んだのです。しかし、こちらの取材の仕方が不慣れだったこともあり、逆に電車に関する実にいろいろなお話を聞かせてくださいました。

1時間半に渡る取材が終わってみれば、ほとんど向谷さんの講演会に参加したような感じでした。向谷さんの鉄道に対する考え方など、そのダイナミズムに生徒たちは感動していました。

さて、帰ってきてからの編集が大問題となりました。とても150字に収まらないのです。

生徒たちの意見としては、取材で得られた情報量が多すぎて、何から並べたらよいのかよくわからない、ということです。何か1つのキーワードから絞ったほうがよいのではないかと、ということまではわかったのですが、その1つが何であるかわからないのです。私からの助言として、取材したものを文章に起こすのではなく、箇条書きにしてみてもどうか、その一つ一つを、当日の向谷さんの表情とか、熱の入り方で順位をつけてごらんと言ったことで、自然と内容は絞れてきました。生徒たちは、何かアイデアをつかんだようです。その後、何度も編集会議を重ねて、最終的に150字の文章を完成させていったのです。

この作業には、膨大な時間を要しましたが、全ページを編集を終えた生徒たちに、いろいろ聴いてみると、「取材相手はこの内容を語っているときに、一番楽しそうで、しかもこの話題がどんどん膨らんでいった、だからこの内容に絞って150字まで詰めました。」と、いかにも論理的に答えました。日ごろの国語指導の中で鍛えられていると頼もしく感じました。

生徒が作った文章も、教師が一気に直してしまえばそれで済みです。しかし、できるだけ生徒自身が、取材の時を思い出しつつ文を推敲していくことが一番大切なところだと言えるでしょう。その生徒の推敲作業に完全に寄り添って助言できるのは、まさに教師も生徒も取材の時に、同じ時間と空間を共有した、という事実だけなのです。その部分に、この絵本制作のエッセンスが詰まっていると考えます。

6 絵並べから学ぶコミュニケーション

さて、ここまでは、全生徒が参加しているといっても、一人ひとりが、各ページを個人で担当しているに過ぎませんでした。ここからは生徒が作成してきた下絵と文をページ順に並べて、全員で意見交換をしていく作業となります。

ところが、ここで問題が発生しました。各生徒が描いてきた下絵が、あまりにもぼやけたもので、どんな絵にしたいのか、はっきりと描かれていないのです。つまり並べたところで、他の生徒たちが見ても、これは何？どんな絵なの？ということになってしまいました。ところが、ほとんどの生徒は絵に自信がありませんので、自分のことは棚に上げて、他人の絵を批判することはできそうもありません。結局、大きな机にずらりと各ページを並べたところで、みんな黙っているだけなのです。

そこで、教師は絵の中で不明瞭となっているもの一つ一つについて、描いてきた生徒に質問します。「それは何か」、「なぜ描いたのか」、「なぜ必要なのか」、「これを描かなければ、この絵はどうなるのか」、「どうしてその位置にえがいたのか」など、生徒と問答のキャッチボールをしていきます。

生徒たちに見られる傾向として、「なんとなく」描いた、と答える場合がかなりあります。これが「文章」の場合、「なぜ、この単語を使ったの？」と聞くと、「なんとなく」と答えることはほとんどありませんでした。日ごろの国語指導の中で、文章を論理的に展開することを行っているため、理由が生徒たちの中に明確にあるわけです。つまり、「絵」特有の現象として「なんとなく」が多く見られるのです。これは、「絵」というものの鑑賞は、個人の感性によるもので、心で感じるもの、人は人、自分は自分でよい、という小学校以来教わってきた考えのようで、ほとんど絵を論理的に分析はしたことがないという生徒たちばかりだからです。

これに対して、ヨーロッパの絵画の分析は実に論理的です。「この描かれている絵は朝か、夕方か、それは、この絵のどの部分から証明できるか、朝だとすれば、なぜ朝である必要があるのか」、といった具合に分析をし、クラスの皆で意見を出し合っていきます。絵も文章と同じく、論理的に一つ一つ文法に従って組み立てられたもののような扱いです。これは、ヨーロッパに多くの民族と国境が存在してきた、という歴史的な背景によるものでしょうから、ここで一概にヨーロッパのやり方が正しくて、コミュニケーション力育成のためには最良のものなのだ、とは言い切れないと思います。しかし、この絵の分析の手法は、生徒たちに「なんとなく」ではない一つのメッセージを持たせた絵作りに役立つだろうと考えて、今回の絵本制作で実践してみました。文の編集で取材した、相手の最も伝えなかったことを150字で表現してきた生徒たちにとって、絵の分析は、こつさえつかめば、かなり論理的なメッセージのある絵作りができるようになりました。

そこで、ここでは作業を仕切り直し、全員で同じページの絵を作りを行いました。1つのページに描く時間は5分程度ですが、今度は「何と何を何のために、どこに位置させて描くか」、とはっきりと

意識しているので、絵は下手でも、説明はうまくできます。この時の意見交換は、実に活発に意見が出てきました。なぜならば、今まさにこの場所で、みんなで作業した絵だからこそ、意見が出しやすい、というわけです。また、教員も一緒に入って絵を描き、生徒と同じように意見交換をしました。教員も含め、全員で取材の時と同じように時間と空間を共有した、ということそのものが、コミュニケーションの土台になることがわかってきました。

前項の向谷実さんへの取材では、「運転室に入れたこと」が一番伝えどころだったので、ほぼ全員の生徒の絵は、運転室が中心になりました。面白いことに、生徒たちの絵は2つのタイプに分かれているのです。1つは運転室から外を眺める向谷さん目線で描いたもの、もう1つは、外から電車の正面を描き、ガラス越しに、車内の向谷さんが描かれたものです。つまり、全く正反対の描写になったのです。文の内容からは、どちらのタイプでもよいはずですが。生徒たちは、その正反対の描写を、客観的な絵なのか、感情が大きく入った絵なのか、と分析していました。なかなか見る目があるなあと、感心しました。

7 絵本制作の効用とこれからの課題

今回の絵本制作は、「コミュニケーション力の養成」のためのケーススタディとして実験的に行いました。これから先の課題として、この制作過程で得た、コミュニケーション力をつけるエッセンスを、どうやって日常の授業の中にフィードバックしていくか、ということになります。そこで、今回の一年以上にわたる絵本制作から得られたポイントをまとめると、次のようになります。

- 1 コミュニケーションは、参加している全員が、すべて同じ情報を共有していること。
- 2 コミュニケーションは、人と人が直接顔を合わせて、その空間を共有すること。
- 3 コミュニケーションは、すべて具体的な言葉でお互いの意思を共有すること。

こうして突き詰めて考えると、コミュニケーションにおいて、まず明らかにすべきことは、自分が相手に「何を」伝えたいのか、ということです。そのためには、自分は「何がわかっている」、「何がわかっていない」のかを見極める必要があります。上記の1～3では「共有」という言葉がキーワードとして入っています。伝えたいことを共有することも、また、知らないことは何か、ということも含めて、お互いが全てを共有することが、コミュニケーションの土台をなしていると言えるでしょう。

今回は「コミュニケーションの育成」を絵本制作からアプローチしたわけですが、他にも方法はあると思います。今後は、生徒たちが作った絵本を、後輩たちがよい教材として、次のコミュニケーション育成プログラムの検討を行きたいと考えています。

最後に、この201系の絵本制作に関して、多くの方々に助けられました。
この場を借りて、感謝いたします。